

2023 年度
自己点検・評価報告書

神戸海星女子学院大学

2024 年 6 月

2023年度 自己点検・評価報告書

目 次

I	自己点検・評価（目標）	2
II	大学・学部等の現状とその評価	
1	FD・SD委員会	3
2	教務委員会	5
3	国際交流委員会	7
4	保育・教職委員会	8
5	学生委員会	9
6	キャリア委員会	12
7	ハラスメント相談委員会	15
8	学生相談委員会	16
9	入試委員会	17
10	宗教委員会	18
11	図書委員会	19
12	生涯教育委員会・地域交流委員会	20
13	英語観光学科	22
14	心理こども学科	24

I 自己点検・評価（目標）

	委員会・学科	2023年度 自己点検・評価 目標
1	FD・SD委員会	教職員の資質向上に向け、組織的な研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。また、実施した研修については、アンケートを実施して結果を共有する。さらに、必要事項については、関係部署との連携を深める。
2	教務委員会	教務関係の成果を可視化し、公表していく。特に、「卒業生アンケート」から学修の実態、成果を分析し、公表する。また、次年度開講科目を精査検討する。
3	国際交流委員会	外国の大学への派遣学生の割合の増加 両学科（1年次生～4年次生）あわせた在籍人数に対し5% 2023年度4月時点 在籍人数：224 目標値：11人
4	保育・教職委員会	学生支援体制の整備の一環として、個々のニーズに応じた指導に取り組み、キャリアセンターとの一層の連携を図る。また、教員採用試験対策講座の更なる強化を図る。
5	学生委員会	充実した学生生活を送るためにきめ細やかな支援を継続して行い、学生の満足度を保持する。 (1) 2023年度開催の大学祭の絶対的支援 (2) 実態を捉えるための年2回のアンケート調査の実施 (3) 下宿生交流会の年4回の実施
6	キャリア委員会	① 低年次からの資格取得、学外インターンシップなどの課外活動支援を行う。 ② 一人ひとりの志望・現状を確認することで動機付けに繋げるため早期にキャリア個人面談を行う
7	ハラスメント相談委員会	学生と教職員に対し、ハラスメント防止研修会等の啓発活動を実施し、ハラスメントのないキャンパスづくりを目指す。
8	学生相談委員会	学生支援部署同士との連携を深め、学生が相談に繋がりがやすいよう環境調整を工夫する。
9	入試委員会	① 学生募集停止について、高等学校等に経緯説明とこれまでの感謝を込めて挨拶回りをする。 ② 過去からの入試関連資料の整理・整頓をする。
10	宗教委員会	① 日本カトリック大学・短期大学連盟に所属の大学・短期大学と連携を深める ② 学生のキリスト教理解のために、国内キリスト教研修の準備を整える
11	図書委員会	「図書ラインナップサービス」の取組みを推進し、学修をサポートする。
12	生涯教育委員会 地域交流委員会	社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う
13	英語観光学科	アクティブラーニングの実施教科増加や、受講に問題を抱える学生に対するオンライン受講対策を含めたハイブリッド授業の導入増加による出席率の維持。
14	心理こども学科	学生の学修を活性化し、主体的参加を促す授業内容や授業方法を工夫する。 ◆教員の連携を図り、学年等の枠を超えた交流の機会を積極的に設ける。 ◆各教員の試み、取り組みなどについて意見交換の場を持つ。

Ⅱ 大学・学部等の現状とその評価

Ⅰ. FD・SD委員会

P【目標】

教職員の資質向上に向け、組織的な研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。また、実施した研修については、アンケートを実施して結果を共有する。さらに、必要事項については、関係部署との連携を深める。

D【現状説明】

○春学期・・・授業公開

授業評価（ポータルシステムにより実施）

非常勤講師へのアンケート(Google フォーム)、および面談

授業改善のためのアンケート（Google フォーム）

授業結果・授業改善報告

以下の研修会が実施された。

4/1 教員対象ハラスメント防止研修会（ハラスメント相談委員会主催）

9/6 AED 講習会の実施（衛生委員会主催）

9/19 & 9/21 安岡先生による教職員の保護者対応講習会の実施

「学生や保護者対応の心構え について～対応する教職員自身の心を
守るために～」(衛生委員会主催)

○秋学期・・・（進行中も含む）

授業公開

授業評価（ポータルシステムにより実施）

非常勤講師へのアンケート(Google フォーム)、および面談

授業改善のためのアンケート（Google フォーム）

授業結果・授業改善報告

C【点検・評価】

- ・今年度はコロナ以前の状況に戻り、面談や研修会も通常通りに実施することができた。
- ・春学期と秋学期の「授業公開」のいずれについても、教授会にて積極的な参加を呼び掛けた。
- ・「授業改善のためのアンケート」の設問が学生に分かりにくい項目があったため、集計の際に分類することにした。
- ・「授業結果・授業改善報告」により、より正確なデータが得られるように質問項目と質問の表現を修正した。
- ・春学期の「授業改善のためのアンケート」は自由回答となっているので、回収率があまりよくなかったが、回答されている内容は、授業運営に大いに参考となった。
- ・「非常勤講師へのアンケート」は回収率が高く、FD・SD委員会において問題として取り上げる内容はなかった。面談は1件のみで「学生の人数減少によりディスカッション等ができず授業到達目標を達成できない」との相談であったため、教務委員長に伝えた。

- ・春学期に3件の研修会を実施したが、秋学期は時間的見通しが立たず、まだ実施できていない。

A【改善策】

- ・FD・SD委員会の例年の業務は一通り無事に実施を終えることができた（進行中の業務を含む）。
- ・教員対象ハラスメント研修会は50名が参加し、研修後のアンケートでは、鑑賞したDVDが非常に分かりやすく大いに参考になったと好評であった。
- ・AED講習会は27名が参加し、前半は教材視聴で、後半は実技説明となっており、講習後アンケートでは、とりわけ後半の実習が貴重な学びとなったとの意見が多かった。
- ・本年度は、ハラスメント委員会、衛生委員会の主催により研修会を3回実施することができた。本年度の目標である関係部署との連携をさらに深めることにより、教職員が様々なことを学び、より良い職場環境のなかで学生指導に反映させてゆけるよう努めてゆきたい。

2. 教務委員会

P【目標】

教務関係の成果を可視化し、公表していく。特に、「卒業生アンケート」から学修の実態、成果を分析し、公表する。また、次年度開講科目を精査検討する。

D【現状説明】

今年度ホームページに掲載した教務関連情報は以下である。

- ① 2022(令和4)年度 春学期 授業改善に関する調査結果報告
- ② 2022(令和4)年度 全学年 G.P.A.分布
- ③ 2022(令和4)年度 卒業生アンケート集計結果

C【点検・評価】

今年度は、コロナも高止まりとはいえ、5類となり、学生の活動範囲も広がった。例えば、ゼミ等での学外研修で体験学習も以前のように活発になりつつある。また、教員の社会活動も増えたことで、学生に現在の社会実態、課題を還元できるようにもなった。その結果が「課題発見力」に良い影響を与えたと推察できる。

経年比較による考察は割愛する。

卒業アンケート結果（教学関連抜粋）単位は%、数字は「満足」＋「ほぼ満足」

アンケート項目抜粋	ET	PC	全体
連絡掲示は適切だったか	81.4	74.2	77.8
教務・学生課での相談	83.8	71.0	77.4
ゼミで課題発見力等が身についたか	93.0	100	96.5
図書館での蔵書の満足度	90.7	83.9	87.3
授業評価は素直に評価したか	97.7	100	98.8

次に②G.P.A.の分布について、下表のように、1.0未満の学生が決して看過できない人数である。次年度の現1、2年での学修支援の強化が課題と考える。

2022年度 学年別 G.P.A.値の分布

	1年	2年	3年	4年	総計
3.0以上	6	14	18	35	73
2.0以上 3.0未満	10	41	56	40	147
1.0以上 2.0未満	6	16	14	25	61
1.0未満	4	3	4	3	14
総計	26	74	92	103	295

①についてはFD・SD委員会の報告と重複するので割愛する。

A【改善策】

昨年度より、3回の欠席かつ5科目以上欠席の学生については、担任との面談により学生課もしくは教務課に報告するようになった。その結果、早期に学修支援が必要な学生に学修支援や学生相談を提供しやすくなったことは、一つの成果と言える。反面、教員個々人の欠席

入力タイミングが一致せず、正確な欠席状況をつかみきれなかったことが、課題である。

閉学に向けて今年度の目標ともなっている、次年度開講科目の精査検討方法を試行錯誤しながら進めてきた。まず、1年次科目で次年度以降も希望する科目調査を実施した。90%近くの学生の声を集めることができたので、これを元に次年度1年次開講科目を検討した。結果として、順調に単位修得した学生については問題がなかったが、合理的配慮学生、その他の欠席超過の学生については、どのように対応するかが次年度以降の大きな課題となる。

一方、今年度まではCAP制に準拠して履修登録を指導してきたが、履修単位を過重負担とならない範囲で増やしても良いこととする。これにより、希望する資格の幅が広がり、卒業単位の修得に向けて意欲が高まることを期待している。

次年度以降、閉学に向け、できる限り、学力保障に努めていきたい。

3. 国際交流委員会

P【目標】

コロナ禍で中止されていたプログラムが、渡航緩和により再開され留学へ行ける環境に戻りつつある中で、留学者数を増やすことを目標とした。数値目標は、両学科（1年次生～4年次）あわせた在籍人数に対して5%の留学生を派遣する。2024年2月時点の在籍者数212名で目標値は10名。

D【現状説明】

今年度の留学生数は合計で10名であった。内訳は下記の通りである。

春学期	中期留学	2名	韓国・靈山大学/2名
夏休み	短期留学	6名	英国・カンタベリー・クライストチャーチ大学/1名 豪国・ビクトリア大学/1名 マルタ・マルタ大学/1名 韓国・淑明女子大学/2名 豪国・幼稚園アシスタントティーチャープログラム/1名
秋学期	中期留学	1名	カナダ・オカナガンカレッジ
春休み	短期留学	1名	米国・ハワイ大学

C【点検・評価】

目標数10名に対して実績10名で達成率100%であった。コロナ禍で渡航ができなかった学生たちに対して留学の不安を無くすように留学説明会において、留学帰国生と留学希望者との交流会を実施した。またPC学科の留学支援金申請資格の緩和によりPC学科からの短期留学者を獲得できた。また学生たちの韓国留学のニーズに対応して、新たに韓国短期留学（淑明女子大学）を開始したことにより参加者を増やすことができた。留学プログラムの広報として、大学祭での留学体験談のポスター展示とスライドショーによる留学プログラムの紹介を実施したことも留学渡航者数を増やす要因になったと考える。

A【改善策】

目標は達成したが、次年度は学生数も減少するので留学支援金の活用を更にPRしていくことにより、留学へのモチベーションアップを図りたいと考える。ET学科の学生が今まで留学参加者の多数を占めていたが、次年度以降はPC学科の学生への留学プログラムの参加を促していけるよう努める。

4. 保育・教職委員会

P【目標】

学生支援体制の整備の一環として、個々のニーズに応じた指導に取り組み、キャリアセンターと一層の連携を図る。また、公立教員採用試験対策講座を強化する。

D【現状説明】

- (1) 進路について保育・幼稚園と一般企業への方向が定まりにくい学生も少なからずみられる。
- (2) マスコミ等で保育・教職関連がいわゆる『ブラック』などと報道され、保護者が心配するケースもある。
- (3) 将来のことを考えたときに、できる限り公立の教職をめざすことも勧めてはいるが、受験者数が伸びない。

C【点検・評価】

- (1) 保育・教職系就職と企業就職で迷う学生には、就職セミナーにも出席するよう勧める必要がある。学生の希望進路把握のために必要に応じて保育・教職委員会独自のアンケート調査等を実施している。さらに、随時面談をしながら学生の迷いを整理していくことも必要である。
- (2) 賃金体系だけ見ると、労働時間特に拘束時間は不利な面もあるが、子どもの成長や感性のすばらしさに触れることが自分の人生にも大いに有益となることを、学生を通じて保護者にも伝えたい。
- (3) 公立と聞いただけで、「自分には無理」とあきらめてしまう学生もいる。本学は小規模なので、大きな大学のように対策講座専門部署を設けることはできない。しかし、担当教員が個々人の個性、学習能力をほぼ把握しているので、更なる啓発が必要である。

A【改善策】

閉学に向けて、学生数が減少することから、PC・ETの枠を外して春休みから教員対策講座を実施する。そこでは、教職課程共通の対策だけでなく、小学校、幼稚園、中高校に分けて頻出問題対策も行う。これまで、新4年生を主な対象としていたが、新2、3、4年生を同時に実施することで、特に上級生の士気を高めたい。さらに、小・中・高校希望の4年生の臨時講師就職について、市郡町の教育委員会とのパイプを広げていく。

また、私立幼稚園・保育園希望の学生については別途春休みスタートで、就職に向けての心構えや子どもを育成する楽しさ、留意点等、何度も面談を重ねている。少子高齢化が進む現代において、プロとしての資質を高めるとともに、本人が納得できる就職先を支援する。

5. 学生委員会

P【目標】

充実した学生生活を送るためにきめ細やかな支援を継続して行い、学生の満足度を保持する。

- (1) 2023 年度開催の大学祭のための絶対的支援
- (2) 学生生活の実態を捉えるための年 2 回のアンケート調査の実施
- (3) 下宿生交流会の実施（年 4 回実施）

D【現状説明】

(1) 大学祭について

2023 年度初めに募集停止の報を受け、これからの学生生活への懸念を少しでも緩和するために、1~4 年次がそろそろ最後の学祭を盛り上げるべく大学祭開催への絶対的支援を行うという目標を掲げた。特に、

- ①学祭参加者数の増員
- ②資金調達
- ③有名タレントの招聘

に支援の必要性を感じ、学生と教職員とが協働で奮励した。

(2) アンケート調査の実施について

学生生活の実態を捉えるために、毎年 7 月と 2 月の学期末にアンケート調査を実施している。春学期は下校後の過ごし方を中心にした学生生活の全般について、秋学期は学生の金銭に対する意識や自身の経済状況の困窮度について調査した。

(3) 下宿生交流会について

2023 年度度第 1 回目の下宿生交流会は、新入生の下宿生 3 名を迎えるため新入生オリエンテーションの 4 月 6 日（木）に開催した。3・4 年次生が新入生に対し、学生生活や一人暮らしの要所についてアドバイスをしたりゲームを楽しむなどして、和やかな交流の時間を持った。第 2 回目は、交流会の日程調整が非常に難しかったため、春学期末に夏休みの居場所について調査するとともに、春学期で困ったことや大学に望む支援等についてアンケートを取った。また学生一人ひとりの様子を確認するため、アンケート回答後に学生課に立ち寄ってもらい、ペットボトルのドリンクを提供した。第 3 回目は 12 月 21 日（木）、年末年始の過ごし方を尋ねることと下宿生同士の交流を目的とし、ランチ会を開催した。そして第 4 回目、2024 年 2 月 9 日（金）に 4 年次生の歓送の目的で開催した。卒業生が自身の 4 年間を振り返り、下級生にアドバイスや励ましの言葉を送る有意義な交流の場となった。

C【点検・評価】

(1) 大学祭について

①2022 年度末、大学祭運営委員は 3 年次生と 2 年次生各 1 名ずつだったため、各ゼミから大学祭委員を選出し、学生全体の学祭に対する意識を高めた。結果的には、積極的な勧誘が功を成し、2 年次 4 名、1 年次生 5 名が大学祭運営委員に加わり計 11 名で活発に発動することができた。大学祭当日の入場者数は 1139 名（内卒業生が約 150 名）であった。1000 人を超えた年度は久しくなく、賑わいのある大学

祭が実現した。学生の参加者数は119名、1・2年次の出席率は89%であった。

②大学祭運営委員の学生は、協賛していただける企業を積極的に開拓した。2022年度13団体152,100円だった協賛が、2023年度は18団体222,500円に増加した。また、「募金のお願い」のチラシを作成し、SNS等で広く呼びかけ、教員親睦会、青谷会、旧知の教員、卒業生などから広く募金をいただくことができた。大学からの援助金は減少したが、学生と教職員が協働で関係者に精力的に働きかけ、大きな成果をあげることができた。

③どんなタレントを招聘するのは学生にとって最大の関心事であり、そのためのイベント事務所とのやりとりは大きな社会経験となるため、例年本学では教員はできる限り関与せず、学生の遂行に委ねている。しかし、2023年度はタレントを招聘できる最後の大学祭という大きな責務を担うため、教員と学生が協力して交渉にあたり、人気のあるタレントを招くことに成功した。900枚近くの子チケット販売(100万円を超える売り上げ)があったが、反響が非常に大きかったからゆえの外部からの誹謗中傷等も多く、対応に心を痛めた学生もいた。

なお、大学祭当日の参加者数が非常に多かったため、教職員全員が警備、誘導、販売等何かの業務を遂行し、多事多忙の一日になった。学生のみならず、教職員全員が団結し大学祭を完遂したことは、ひとえに学生委員会の熱い想いのおかげだと自負している。

(2) アンケート調査の実施について

春学期は異性との交際において悩みを抱えている学生の情報を、また秋学期は経費節減のため暖を取ることや食事を極力抑制している学生の情報を察知したため、学生の実態を捉えるべく文言に留意しながらアンケートを作成し、調査を実施した。回答率は春学期40%、秋学期65%であった。

春学期は異性との交際において、悩みを抱えているという情報は特に得られなかった。しかし、学生の学内では見えない部分、つまり家での過ごし方を感知することができ、学生の実態を理解する参考資料になり得た。

秋学期においては、学生が金銭関連で苦勞している現実を知ることができた。大半の学生が、洋服代、交際費、美容費、食費、嗜好品代、推し活等にお金を使い、食費は1か月1万円以内と回答している。一方、経済的不安を感じている学生は自宅生27%・下宿生50%で、ローン、光熱費、食費、学費などの支払いを抱えていたり、賃金差、交通費の節約、交際費、就活のための交通費等に悩んでいたりとわかった。また、募集停止に対して不安に思うこと・困っていること、今の大学生生活において支援してもらいたいこと等の実直な記述が多々あったため、早急に各部署に回答文を依頼した。3月中旬には学生にフィードバックをするつもりである。

(3) 下宿生交流会について

第1回目の学生の参加者が6名、第2回目に学生課に立ち寄った人数が11名、第3回目の参加者数は4名、第4回目が3名であった(毎回5~6名参加する教職員を除く)。

下宿生は現在19名在籍しており、下宿生の会に参加する学生は定まっているが、参加した学生の様子は捉えることができる。第2回は飲み物の配布だけであったが、学生課に立ち寄り、言葉を交わすことで学生の様子を察知することができた。

2021年度に実施したアンケートでは、下宿生の会に参加する意思はない、干渉さ

れたくないとの回答があり、下宿生の会の存続意義を憂慮したが、今年度のアンケートでは、日程が合えば参加したいという回答が多かったことや支援を求める学生が多くみられることから、次年度も引き続き下宿生の会は実施する方向で考えたい。今年度は食料品や物品の寄付を教授会等でも呼びかけたため、たくさんの贈答品を渡すことができ、教職員の下宿生への配慮を高めることができたと感じている。

A【改善策】

年度初めに告知された募集停止の報を受け、今まで以上に学生の気持ちや様子に留意し、学生の不平不満が膨らむことがないように努めた一年になった。今後年度を重ねるごとに学生の人数が減り、学生の活動全般の縮小が懸念されるが、今まで実施していた活動や行事はできる限り継続させ、今まで以上に学外と提携するなど多方面に目を凝らしながら工夫し、学生と教職員が協働し、充実した学生生活を送れるよう尽力していきたい。

6. キャリア委員会

P【目標】

- 1 低年次からの ①資格取得、②学外インターンシップなどの課外活動支援を行う。
- 2 一人ひとりの志望・現状を確認することで動機付けに繋げるために早期にキャリア面談を行う。

D【現状説明】

新型コロナウイルスの影響が落ち着き、観光業界をはじめとした企業求人数は増加している。学生にとってはしっかり活動をすれば志望業界に就職しやすい状況であるといえる。

就職活動の早期化傾向は継続しており、3年次生対象の夏季インターンシップ後、早期選考を行う企業が一層増えている。結果、就職活動開始が早かった3年次生の10.2%（民間就職希望者39名中4名）は12月に内定を得ている。昨年度の年内内定獲得者は5.6%（民間就職希望者53名中3名）であった。

このような状況下では更なる低年次からのキャリア教育支援の充実と、個の状況に沿った支援の場で資格取得や課外活動への参加を促し、自身の卒業後の進路について考える機会を提供していくことが必要である。

<1-2年次生対象 キャリアプログラム>

キャリアデザイン入門（1年次対象）

KAISEI パーソナリティを学ぶ（学長）	本学のキャリア教育（職員）
適性検査（職員）	将来のために今やるべきこと（学科教員）
適性検査の結果報告（職員）	

海星学Ⅰ・Ⅱ（2年次対象）

海星学Ⅰ	海星学Ⅱ
① 「社会を知る」（日本年金制度）	「卒業生によるピアサポート①」
② 「社会で働く」とは（職員）	「卒業生によるピアサポート②」
③ 「職種・業界」を学ぶ（外部講師）	「社会で働く①」（職員）
④ 「キャリアを考える」（職員）	「社会で働く②」（学科教員）

※E T学科はオンラインとハイブリッド授業、P C学科はハイブリッド授業で実施

「卒業生によるピアサポート」

※どちらの学科を受講するかは選択制

英語観光学科	ホテル勤務（2022年3月卒業生） 旅行・IT関連会社勤務（2021年3月卒業生）
心理こども学科	認定こども園勤務（2020年3月卒業生） 公立小学校勤務（2019年3月卒業生）

本学のキャリア教育は教育理念である「社会や企業が求める人間力を身につけるため」というKAISEI パーソナリティを根幹としている。学科教員、外部講師、キャリアセンター職員及び卒業生の講義により実社会でのニーズを把握することで自己成長の目標設定を行い、

それに向け学修や研究を深めていくことでキャリア形成を明確にすることができると考えた。

また、従来の資格講座は最小開講人数（7名以上）の設定があり未開講となるケースがあったことから、人数縛りが無いオンデマンド講座の受付を2023年7月より開始した。

C【点検・評価】

1-① 低年次からの資格取得支援

2023年度 資格講座申込実績

	申込実績	内訳
1年次生	0件	—
2年次生	0件	—
3年次生	1件	英語観光学科生：秘書検定2級講座
3年次生	1件	英語観光学科生：MOS excel + MOS word 講座

2023年度の低年次生からの資格講座申込は0件であった。実績に繋げることは出来なかったが、低年次向けキャリアプログラムにおいて、在学中に資格取得をする意義や動機付けとなる機会提供をおこなった。

1年次のキャリアデザインの講義はグループワークを中心に行い、自己のキャリアについて考えて行動できるようになることを到達目標としている。講義では社会情勢や雇用形態など社会人として必要な基礎知識の修得と、学生個々が今後のキャリア（仕事）を考えるきっかけとすべく適性検査を行い、その結果の振り返りから自己分析を深めた。

2年次の「海星学」では春学期4回、秋学期4回の講義を実施した。春学期は「社会を知る」「社会で働くとは」「業種・業界を考える」「キャリアを考える」について外部講師及びキャリアセンター職員による講義を実施した。学生アンケートでは、複数名が在学中に秘書検定やユニバーサルマナー検定など就職に活用できる資格取得を目指したいと回答した。

秋学期のピアサポートプログラムにおいて、英語観光学科では宿泊業、観光業で働く卒業生による講義を実施し、業務内容やその仕事に就くために必要な知識や能力を知る契機とした。学生のアンケートでは「業界・企業研究の必要性」「TOEICスコア向上や資格取得の必要性」「インターンシップの重要性」を学んだという回答が多くあった。

心理こども学科では認定こども園、小学校から実際の教育現場について話を聞くことができ、学生のアンケートからも「子供と関わる仕事についてより考えることができた」などの回答が多くあった。これらのアンケート調査から学生へのキャリアに関する意義や動機付けには効果があったと考える。

しかし、その後の講座申込まで繋がらなかった。これはキャリアプログラム参加で意識が高まった後に学生へアプローチする機会がなかったことが要因だと考える。更にオンデマンド講座の特徴（メリット）について学生への周知徹底が図れていなかったことも原因の一つであると思われる。今後キャリアプログラム実施後、資格講座申込まで繋げるための新たな施策の検討と、オンデマンド講座のメリットを再度しっかり学生へ周知していくことが必要である。

1-② 学外インターンシップなどの課外活動支援

2023 年度 課外活動参加実績：2 件

学科／年次	詳細
心理こども学科 2 年次生	兵庫県インターンシップ（兵庫県警）
英語観光学科 2 年次生	わたしのキャリア研究会

2023 年度の課外活動参加実績は 2 件であった。これは低年次生向けキャリアプログラムを通じ、キャリアへの関心が高まったことがきっかけであったといえるが、実績としては改善の余地がある。在学中の課外活動参加メリットをより学生個々に周知し、行動喚起を促していくことが必要である。

2 早期からのキャリア面談

2023 年度より、民間企業への就職を希望する全学生に対し、夏休み期間 7/18～9/22 を使った 1 回 30 分の個人面談制度を導入し、40 名中 25 名（62.5%）が利用した。

学科別の内訳は、英語観光学科 34 名中 22 名（64.7%）、心理こども学科で民間就職希望 6 名中 3 名（50%）であった。早期に学生個々の卒業後の進路に関する傾向を把握できたことは、その後のキャリア面談において、個に応じたサポートに繋がった。

また、学生にとっても就職活動を前向きに捉えていく意識付けになった点は評価できると考える。しかし、全体として 80%の学生が利用するよう制度の再検討が必要である。

A【改善策】

低年次のキャリア教育科目は、一定の成果が出ていると考えており、次年度も踏襲していく予定である。

1-① 低年次からの資格取得

海星学の「卒業生によるピアサポート」は、実施後のアンケート結果から在学中の資格取得に対する意識喚起に繋がっている。引き続き、在学生と年齢が近い卒業して 2～3 年程度の卒業生を招聘し、学生と親近感がとれるよう配慮していきたい。

そして、資格取得に対する意識喚起で留まらず、学生が講座申込までの具体的な行動に移すまでの導線として、資格講座に関するガイダンスの実施を検討していきたい。

1-② 学外インターンシップなどの課外活動支援

課外活動に関しては資格取得と同様、自ら自発的に情報を集め行動までできる学生は少ないと考えられるため、タイムリーで具体的な情報を伝える必要があると考える。そのために個別支援の場であるキャリア面談を通じ、学生毎の要望や状況に応じた支援を強化すると共に、低年次生を対象としたセミナー等を企画していきたい。

2 一人ひとりの動機付けに繋げるため早期にキャリア面談を実施する

月 1 回キャリアセンターが実施する就職準備セミナーへの出席率を向上させ、早期から学生とのコンタクトを図ることで、個々の状況や全体傾向の把握に繋げると同時に学生側からも相談しやすい関係作りを行う。そのうえで、個人面談において学生一人ひとりに寄り添ったキャリア支援を教職員の協働体制で推進していきたい。

7. ハラスメント相談委員会

P【目標】

学生と教職員に対し、ハラスメント防止研修会等の啓発活動を実施し、ハラスメントのないキャンパスづくりを目指す。

D【現状説明】

- ① 教員対象ハラスメント防止研修会（4月1日）：教員オリエンテーションの中で実施、出席50名、アンケート回収88%であった。DVD視聴『アカハラといわれなかったためにコミュニケーション・スキルアップの実践』と本学での対応事例を紹介した。内容についても概ね好評で、分かりやすかった、具体的な相談事例を知れてよかったという感想が多く、定期的な実施を求める声も複数寄せられた。
- ② 職員対象ハラスメント防止研修会（6月29日）：出席16名。DVD視聴『職場のパワハラ対策シリーズ③パワハラと指導の違いを学ぶ』とグループワークを実施した。アンケートの結果より、これまでに56%の方がハラス被害を受けていること、その3割が誰にも相談できなかったということが明らかとなった。研修を通じ、パワハラのチェックポイントを理解し、「ありがとう」月間を実施した。DVDを用いた研修はわかりやすいと好評で、ほぼ全員が研修は今後の仕事に活かせると思う、と回答していた。
- ③ 学生対象ハラスメント防止研修会（7月4日）：基礎ゼミ後半で、1年次生を対象に実施した。DVD視聴『ハラスメントを生まない関係作り』と本学での対応事例を紹介した。アンケートの結果より、ほぼ全員がアカデミックハラスメントを知らなかったことや、全員が研修は今後の学生生活に活かせると思う、と回答し、実施の意義が示された。

C【点検・評価】

学生数の減少、また、相談窓口の整備の影響か、本年度、ハラスメント調査・調停委員会にまであがるような学生発信のハラスメント相談がなかった。社会的にも「コンプライアンス違反」予防への意識が高まっていることより、学内全体でハラスメントにならないようなコミュニケーションを心掛けるようになっていく印象を受ける。一方で、過去を含めたハラスメント被害の報告は職員間に多くあるが、相談員が同僚ということもあり、気軽な相談窓口になりにくい可能性も考えられた。

A【改善策】

①と②については次年度も引き続き実施し、互いを尊重し合う関係作りを呼び掛ける。学生相談室をハラスメント被害相談の窓口として利用できることも伝えていく。③については次年度以降は学生対象の被害実態アンケートの実施を検討中である。

8. 学生相談委員会

P【目標】

学生支援部署同士との連携を深め、学生が相談に繋がりやすいように環境調整を工夫する。

D【現状説明】

2023年度より、保健室の職員、学生相談室 Maris の相談員に学生相談委員会への出席を依頼することとなり、学生相談に関わる教職員の間で、学内での支援の必要な学生についての情報交換が可能になった。学修支援室 Stella の利用状況についても支援員と情報交換をし、学内のほぼ全ての相談部署でニーズのある学生の状況について共有することが可能となった。

C【点検・評価】

学修面だけでなく、メンタル面でのサポートが必要な場合に、Stella 利用の学生を学生相談室に繋ぐことや、逆に、学生相談室のケースを、Stella 等に繋ぐこともあり、関係部署がより連携をとりながらの支援が可能になった。また、まだ相談機関には繋がってはいないが、予備軍で保健室利用の多いケースや、教務で把握していて心配なケースのうち、かつて相談があり中断していたケースについては、相談室の方から声掛けを行うなどの工夫を行った。相談に来ていたが、中断しているケースのその後について、他の部署から、現状を知る機会にもなり、情報交換が役立っている。

A【改善策】

現在合理的配慮の対象になっており、メンタル面の学修への影響が大きい学生等には学生相談室利用を勧めているが、実際に相談まで繋がるケースが少ない。次年度は相談しやすいイベントの実施等試みたい。また、大学での具体的な支援が求められるケースについては事例検討会の実施も予定していく。

9. 入試委員会

P【目標】

学生募集停止について、高等学校等に経緯説明とこれまでの感謝を込めて挨拶回りをするとともに、過去からの入試関連資料を整理・整頓する。

D【現状説明】

兵庫県・大阪府を中心に優先訪問校 183 校を選定し、4 月 21 日（金）より教職員にて訪問を開始した。事前に高等学校長宛に送付した文書を進路指導部に持参し、今回の経緯及び在学生のいる高校には教育環境及び就職支援の継続を案内した。

入試関連資料整理については、下記のとおり区分した。

- ・大学案内・入学要項・学生要覧
- ・出願手続き状況一覧
- ・入試問題（マスタ）
- ・入試問題集（赤本）
- ・入試問題・解答用紙
- ・願書受付簿
- ・入試リスト
- ・AO 課題・評価・AO エントリーシート
- ・入試委員会議事録
- ・入試委員会企画関係書類
- ・入試運営委員会議事録
- ・予算・執行関係書類

C【点検・評価】

挨拶回りは 174 校に訪問。高等学校側の担当者の反応としては、

- ・本心から残念・寂しい（100 校）
- ・社交辞令（48 校）
- ・知らなかった・関心なし（26 校）

という結果だった。本学のきめ細かい指導を評価してくれていた高等学校も多く、本学閉学を残念に思う声が多く聞かれた。

書類整理を行うなかで、欠落している部分はあったが、出来る限りの資料については整理・整頓が行えた。

A【改善策】

書類整理については、上述した保存書類については重要書類として文書保存規程に則り第 1 種永年保存として整理したが、資料数が膨大であり、改めて内容精査し、第 2 種 10 年保存に切り替えていく必要性も検討しなくてはならないと考える。

10. 宗教委員会

P【目標】

- ① 日本のカトリック大学・短期大学連盟に所属の大学・短期大学と連携を深める。
- ② 学生のキリスト教理解のために、国内キリスト教研修の準備を整える。

D【現状説明】

- ① については、6月9日～10日に本学等で実施された、カトリック大学・短期大学連盟総会において、宗教委員会の成員が受け入れの準備、当日の対応にあたり、他大学からこられた先生方との親睦を深めることができた。
- ② ①でコンタクトをとれた長崎純心大学、鹿児島純心短期大学の学長先生に依頼し、2024年度2月の国内キリスト教研修の実施に向けて、打ち合わせと下見の出張を実施予定である。現在までに研修の日程の作成が行われている。

C【点検・評価】

- ① については、カトリック大学・短期大学連盟総会に参加された大学・短期大学の先生方との交流が実現した。本学でのカトリック教育について紹介することができ、また、宗教委員会の下部組織であるサンタガールズの活動についても報告することができた。海星協力金の送付について、本学閉学後に引き継いでいってもよいとする大学もあった。また、②の研修旅行においてプログラムに参加していただくよう2月21日からの下見出張において、計画中である。
- ② についても、今後研修旅行の日程作成とプログラムに参加を依頼する大学・短期大学との交渉にあたる予定である。

A【改善策】

- ① については、今年度の宗教委員会の取り組みの結果について、何らかの形で、カトリック大学・短期大学連盟総会に報告する形をとりたい。
- ② については、まだ整っていない事前指導・事後指導、学生への広報の時期・形式について今後相談していきたい。

11. 図書委員会

P【目標】

「図書ラインナップサービス」の取組みを推進し、学修をサポートする。

D【現状説明】

- (1) 「図書ラインナップサービス」について、2023年4月1日から2024年2月6日まで学生15名17件の利用があり、合計246冊の「図書ラインナップ」から合計154冊の利用があった。この利用冊数は、貸出冊数と把握できた館内利用冊数である。
- (2) 図書館員は、レファレンスサービスにおいて学生の考える過程を重視し、学生が提示した課題やテーマにもとづき図書を探した。観点が固定されないよう図書館員全員で取組み、学生一人一人のテーマと思考過程に対応した図書選びを推進した。

C【点検・評価】

- (1) 「図書ラインナップサービス」のブックトラックの前では、学生がラインナップされた図書を閲覧したり、1年次生が足を止め友人と話題にしたりする姿が見られた。「図書ラインナップサービス」の現物の提示は学生への卒業研究の意識づけに効果的であった。
- (2) 「図書ラインナップサービス」の利用者がラインナップされた図書をもとに関連する他の本の所蔵について質問したり、より深く学ぶ方向で新たに図書を選んだり、さらに自分で選んだ図書を指定してラインナップへの追加を申し出る等、図書利用を通じて学生の主体的な学びが促進された。
- (3) 図書ラインナップサービスの利用で卒業研究に本格的に取組み始めた学生も見受けられた。
- (4) 図書館員が全員で一人一人の学生のテーマについて20冊程度を目途に図書を探すことにより、多様な視点で図書が選ばれ利用提案がなされており、その中から学生が主体的に図書を選ぶことができる。このサービスには少なくとも1週間程度の時間を要し、時に学生から短期間での図書の用意の希望があるが、短期間での対応は容易ではない。
- (5) Google ClassroomでのPRやメールでのリマインド等により、継続した利用をサポートするも、ラインナップした図書が利用されず1カ月以上経過する場合があった。

A【改善策】

- (1) 学生が期間の余裕をもって図書ラインナップサービスを利用できるよう、Google ClassroomでのPRを強化して意識付けを図る。
- (2) メールでのリマインド等、学生に直接届く方法で利用促進を行う。

12. 生涯教育委員会・地域交流委員会

P【目標】

基準9-③ 社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う。

D【現状報告】

本学では、神戸市との連携講座である、「こうべ生涯学習カレッジ」を担当している。2023年度も本学講師を派遣した。

また、本学では、大学教育の地域還元という位置づけで、毎年学内において、公開講座と生涯学習講座を開講している。本年度は、11月に公開講座を行った。また、生涯学習講座を12講座企画し、定員を満了した9講座を実施した。

外部依頼の講演としては、兵庫県3件、明石市8件、姫路市1件、神戸市2件、宝塚市立公民館1件（8回）、芦屋市立公民館3件（5回）、西宮市立公民館1件、教育委員会18件、その他教育機関2件などを、本学教員が担当した。

7月以降に学内で行われた「海星子育てひろば『ステラマリス』」については、参加親子11組7回で実施した。また、「海星子育てひろば」は、「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成金」の交付をうけ、「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進・子育て等に関する相談、援助の実施・地域の子育て関連情報の提供・大学の子育てに関する専門的な知識を地域に役立ててもらおう場とする」ことを目的として活動し、報告書をまとめている。

さらに、本学学生の学習成果としては、児童養護施設3カ所でのサンタガールズ（クリスマスプレゼント贈呈）、新聞への投稿文掲載（1件）などがあつた。また、クラブ活動としては、バレーボール部の児童養護施設の子どもたちへのバレーボール指導、音楽部の神戸文学館でのコンサート、Chorus Stella Marisのカトリック神戸中央教会でのチャリティーコンサート、創作部の六甲病院でのアートセラピーボランティアなどの活動、キッズイングリッシュクラブの子ども英語教室（神戸市立住之江公民館：全10回）、同じくキッズイングリッシュクラブのサマースクール（神戸市立南須磨公民館：1回）があつた。

C【点検・評価】

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、本学の公開講座・生涯学習講座を中止することが続いていたが、昨年度より、順調に開講していくことが可能となった。

7月以降に学内で行われた子育て支援事業「海星子育てひろば」では、乳幼児の参加もあるため、本年度も新型コロナウイルス感染拡大防止への対応・対策を行いながら実施した。本年度は、学生スタッフに加え、教員が各専門性を活かして支援にあたる機会も増やし、参加親子の100%が「満足している」とアンケート結果に答えるなど、好評のうちに終了した。

生涯学習講座も同様に、教室換気を行いながら開講し、問題なく終了した。アンケート結果も良好であり、語学講座では、94%が講座内容を満足であるとし、90%が来年度の継続を望んでいる。公開講座は、定員70名のところ、申し込みがそれを上回り、生涯教育への関心が高まっていることがわかる。後日配信したYouTube録画は、1カ月で閲覧数が100件を超えた。今後は、これらの要望に応えるような企画が必要となってくる。

A【改善策】

公開講座や生涯学習講座への需要が高まっていることから、その要望に応じることができるよう、公開講座や生涯学習講座を次年度開催に向けて調整していく。

特に、生涯学習講座では、定員を15名から20名に戻し、開講講座の数を増やすことでも対応していく。具体的には、卒業生が参加しやすい土曜日にも講座を開講する。また、土曜講座は、卒業生の受講料を2割引として、母校での学びの機会を設ける。さらに、開講が決定した講座で専任教員が担当する科目については、在学生にも無料で受講できるように調整し、学生の学びの機会も増やしていく。

公開講座は、例年通り土曜日の開講とし、事前予約を必要として定員を70名とするが、講座を別教室で中継することで、定員を超えた要望に対応し、また、後日録画をYouTube動画として配信することで、大学の地域開放を進めていく。

13. 英語観光学科

P【目標】

アクティブラーニングの実施教科増加や、受講に問題を抱える学生に対するオンライン受講対策を含めたハイブリッド授業の導入増加による出席率の維持

D【現状説明】

コロナ禍以降の入学者に特別配慮を必要とする学生が見られることや、学生数の減少により従来のアクティブラーニングをより積極的に展開しなければならない状況である。

① ゼミでのフィールドワーク

ゼミでのフィールドワークを通じてより社会の課題を発見し、自ら問題意識を持ち課題解決を図る取り組みを実施する。事前学習・現地調査・事後学習・発表。

- ・酒井ゼミ（3年）・・・「丹波篠山の観光の現状と課題」現地調査
- ・一尾ゼミ（3年）・・・「分散型宿泊施設が地域振興にどの様に貢献しているか～愛媛県大洲市の観光の現状と課題～」現地調査

② 合理的配慮を受ける学生の講義出席率の向上

対面授業参加が見込めない学生に対してより質の高い講義の提供を学生個々の状況に合わせてオンライン（遠隔授業）、オンデマンド授業等で実施する。

・実施科目

科目	対応内容	対象者数
コミュニケーションと文化	オンライン&課題対応	1名
Reading401	オンライン&課題対応	1名
神戸学	オンライン&課題対応	3名
比較文化論	オンライン&課題対応	1名
日本文化史	オンライン(オンデマンド)&課題対応	1名
観光と世界遺産	オンライン&課題対応	1名
演習Ⅱ	オンライン&課題対応	3名
演習Ⅳ	オンライン&課題対応	1名

C【点検・評価】

オンライン授業では個々の理由により対面での受講が困難な学生を対象に、受講科目の特性も考慮しプログラムが組まれた。報告では延べ12名の対象者が以下の通りの成果であった。評価対象は66%以上のため1名のみ46%の出席率で評価対象外となった。教員間の協力や担当教員の工夫と努力が見られる。

科目	成果（出席率）
コミュニケーションと文化	73%
Reading401	73%
神戸学	93%・66%・46%
比較文化論	100%
日本文化史	66%

観光と世界遺産	80%
演習Ⅱ(課題対応)	66%
演習Ⅱ	86%
演習Ⅱ(課題対応)	100%
演習Ⅳ	66%

A【改善策】

目標設定時における対面受講困難者の正確な人数や状況把握ができていなかった。目標設定において受講登録が完了していないため、PDCAの設定に反映できていなかった。改善策として学期のスタート時に配慮を必要とする学生の中で対面受講困難者の状況を把握しリストを作成後、事前の対応を教員間で共有する。

14. 心理こども学科

P【目標】

学生の学修の活性化・主体的参加を促す授業内容・方法を工夫する。

- ◆教員の連携を図り、学年などの枠を超えた交流の機会を積極的に設ける。
- ◆各教員の試み、取り組みなどについて意見交換の場をもつ。

D【現状説明】

前学科主任の2016年度から、心理こども学科は自己点検・評価の目標に「授業改善」を掲げてきた。2023年度もその真意を継承し、「学生の学修の活性化・主体的参加を促す授業内容・方法を工夫する。」という目標を設定した。しかしながら、一概に授業内容や方法の工夫といってもその仕様は多岐に及ぶため、本年は特に、「教員の連携を図り学年などの枠を超えた交流の機会を積極的に設ける」という観点から自己点検を行うことにした。そして、そのために各教員同士が意見交換の場をもつように努めた。

各教員は、2023年度に行った取り組みについてA4用紙1枚にまとめ、2024年1月26日までに学科主任に提出した。書式の形式は自由で、写真入りの報告書もあった。そして、それらを主任が学科会議の報告書として資料をまとめた。

C【点検・評価】

1 ◆教員の連携を図り、学年などの枠を超えた交流の機会を積極的に設ける

この目標に対する取り組みは、概して、

- ①英語観光学科教員との連携による取り組み
- ②学科教員同士の連携による取り組み
- ③学年を超えた取り組み

の3項目に分類された。

① まず2023年度の特記事項として、「基礎演習」と「海星学」をET学科とPC学科の合同クラスで実施したことが挙げられる。これにより、学生は学科の枠組みを超えて交流することができ、教員は授業についての話し合いの時間を持つことで、学科のディプロマポリシーに基づく価値観の違いを理解した。そして授業では同じ課題に対しても発表の観点が異なり、刺激を受け、視野を広げることができた。

② 学科の取り組みである「海星子育てひろば」においても学科教員の連携による取り組みが例年以上に果たされた。音楽教員が身体表現遊びを実践し、保護者に対しては楽器指導を行った。また、園芸療法士の資格を持つ保育担当の教員が、ゼミで栽培しているジャガイモを使ってジャガイモ掘りの活動を行ったり、演習Iで学生が栽培した花を押し花にしシールとして活用、また幼児教育指導法で栽培した花をドライフラワーに加工し香りの石鹸にしたりするなど、授業との連携も実践した。

このように教員の専門性を活かし、学科教員協働で子育てひろばに携わることで、企画の幅が広がり、内容を深めることができた。すなわち複数の教員の指導により学生の学びが多様化し、実践力も高めることができた。また、授業の成果を地域活動の場で活かすことができ、とても意義のある活動を成し得た。

③ さらに、「演習」「卒業研究」などでは、学年を超えた取り組みが多くあった。「上位の学年と合同授業を行うことで、また上級生が低年次の学生の授業でシ

ンポジウムを行うことで少しだけ不安が無くなった」とか、「学びに見通しをもって研究を始める意欲をもてた」など、これからの学びについての理解を得ることができた。「音楽Ⅱ」では、3年次の学生が合唱、歌のテストの伴奏を引き受けてくれたことにより、伴奏者である3年次の学生に対する憧憬の念から自身の3年次の像を想像することができ、自分もそうなりたいという励みが芽生えた。また、3年次生は自分のピアノが役に立った喜びを感じるとともに、自身のピアノ技術のさらなる向上に努め、相互に利点が得られた。

こうした学年を超えた繋がりが学科行事において成果として現れた。2023年度の「海星☆心理こども学科フェスティバル」は、4年次5名、3年次9名、2年次11名がスタッフとして運営し、学生主体の理想的なフェスティバルが実行できた。各授業単位での小さなつながりがあればこそ、大きな組織としての活動が実現したと考えられる。

2 ◆各教員の試み、取り組みなどについて意見交換の場をもつ

「演習Ⅱ」「3年次キリスト教研修」で、教員同士の意見交換の場があった。ともに行事に関連する場面であったことが見受けられる。「大学祭」「海星☆心理こども学科フェスティバル」も同様、行事においては日常と異なる時間を共有したことにより意見交換ができる場が多くなった。日々の授業だけでなく、行事の施行にも大きな意味があると考えられる。

また、2月の学科会議では、各教員の試みや取り組みを発表し合い、自分の授業を客観的に捉え、授業方法を再考するなど、スキルアップするための貴重な学修の場になった。

3 その他の取り組み

本年度の目標に設定した2項目以外においても、各教員は授業で感想やコメント、意見を書く時間を設けたり、グループ討議、ロールプレイ、プレゼン、ディベートなどを取り入れたりするなど、授業に主体的に参加させ授業を活性化するために様々な取り組みを実践した。また、授業を振り返る時間を取るとともに、わかりやすいレジュメやスライドの作成に努め、集中が途切れることがないように常に意識を授業内容に向けさせる努力や工夫をした。

A【改善策】

2月の学科会議の報告書や発表によって、各教員は真摯に自分の授業と向き合い、日々学生に教授する内容・方法を検討し、奮励していることが察知できた。しかし、この評価はエビデンスに基づく結果ではない。改善点として、アンケート結果などを取り入れること、さらには本学のみならず他大学における斬新な事例を研究することが考えられる。

次年度以降、授業の受講人数が減少していく。配慮が必要な学生も少なくはない。そうした環境の中で、授業方法についての模索は終わりが無い。現状を踏まえながら自身にとっての新しい方法を思案し、取り入れ、実践するフロンティア精神も大切である。そして、これまで培ってきた授業に対する情熱と探求心を基盤に、次年度も学生と協働で作る授業の生成に取り組んでいきたい。